

小ねこはなにを知ったか

小川未明

青空文庫

親^{おや}たちは、生き物^{もの}を飼^かうのは、責任^{せきにん}があるから、なるだけ、犬^{いぬ}やねこを飼^かうのは、避^さけたいと思^{おも}っていました。けれど、子供^{こども}たちは、日^ひごろから、犬^{いぬ}でも、ねこでも、なにかひとつ飼^かつてくださいといっていました。

ちようど、そのころ、近^{きん}所^{じよ}でかわいらしいねこの子^こが産^うまれたので、それを見^みてきた男^{おとこ}の子^こは、これ^{これ}を姉^{ねえ}さんや、小^{ちい}さい兄^{にい}さんに話^{はな}したので、三人^{にん}は熱^{ねつ}心^{しん}に、お母^{かあ}さんのところへいつて、ねこの子^こをもらつてきてもいいでしょうと頼^{たの}んだのであります。

お母^{かあ}さんは、下^{した}を向^むいて、仕^{しごと}事をしながら、どう答^{こた}えていいものかと、しばらく考^{かんが}えていられたましたが、

「お父さんとうがいいとおっしゃったら、飼かつてもいいが、おまえさんたちに、その世話せわができますか。なかなか手てのかかるものですよ。」と答こたえられました。

これを聞きくと、子供こどもたちは、もしや、お母かあさんに、頭あたまから、いけないといわれればそれまでだと思おもっていたのが、こうやさしくいわれると、半はん分ぶんは、もはや、自分じぶんたちの願ねがいがかなったように思おもわれて、三人にんの顔かおは、にこにことして輝かがやきました。

「ねこの世話せわなんか、できますとも。だって、あんなにかわいらしいんだもの。」と、いちばん末すえのおとここの子は、叫さけびました。

「お父とうさんに、願ねがいして、いいといったら、飼かつてくださいね。」と、兄あにのほうほうが、いいました。

「おお、うれしい。」と、姉あねも、いつしよになつて、喜よろこびました。三人にんの姉きょうだい弟だいは、お父とうさんの歸かえりを待まっていました。そして、どうしても頼たのんで、それを許ゆるしてもらわなければならぬときめていました。

「三人にんで、その世話せわができるなら、飼かつてもいいが、おまえたちにできるかね。」と、お父とうさんは、笑わらっていました。

「できます。」と、姉きょうだい弟だいは、答こたえて、とうとうかわいらしいねこの子こを、近所きんじよからもらつてきました。

小ねここは、同おなじ母親ははおやの腹はらから、いつしよに生うまれた兄きょうだい弟だいと別わかれて、この家うちにきて、こうして、長ながく養やしなわれることとなつたのでありました。しかし、小ねここにとっては、それが、兄きょうだい弟だい

と永えいきゆう 久ひさの別わかれであつたことはわかりませんでした。三人にんの姉き弟あには珍めづらしがつて、小ねこを下したに置おきません。小ねこもまた、みんなから別わかれてきたという悲かなしみを忘わすれて、はね上あがつたり、飛とびついたりして、お嬢じようさんや、坊ぼっちゃんたちと遊あそんだのであります。

三人にんは、自分じぶんたちが食たべる前まえに、小ねこにご飯はんを造つくつてやりました。こんなふうないに、小ねこがこの家うちへきてから、にわかないに、内ないじゆうが陽よう気きになつて、はや幾いく日にちか過すぎたのであります。そのうちに、小ねこは、いつまでも子こ供どもでなかつた。そして、もはや、いままでのようこに、はねたり、飛とび上あがつたりして遊あそばなくなりなりました。

ちようど、この時分じぶんから、三人にんは、ねこのめんどろみうを見てやる
 ことが、だんだんうるさくなつたのでした。

「姉ねえさん、ねこにご飯はんをおやりよ。」と、弟おとうとがいいますと、
 「あら、ずるいわ。こんどは、私わたしの番ばんではないわ。おまえの番ばん
 じゃないの？」と、姉ねえさんはいいました。

ねこは、また、ねこで、だんだん横おうちやく着ちやくになつてきました。
 鰹かつぶし節ぶしをたくさんかけなければ、ただ香においを嗅かいだばかりで食たべ
 ようともいたしません。そうでなければ、鰹かつぶし節ぶしのところばかり
 拾ひろつて、白しろいご飯はんのところは、残のこしてしまいます。

「お母かあさん、うちのねこは、ご飯はんを食たべませんよ。」と、子供こどもた
 ちはいいました。

すると、お母^{かあ}さんは、仕事^{しごと}をしながら、

「しんせつにしてやらないからですよ。鰹^{かつぶし}節^{ぶし}をたくさんかけてやれば、お腹^{なか}がすいているのなら、食^たべないことはありません。」
といわれました。

みんなは、そうかと思^{おも}いました。それで、こんどは、鰹^{かつぶし}節^{ぶし}をたくさん削^{けず}って、かけてやりました。ねこは、鰹^{かつぶし}節^{ぶし}のかかっているところだけ食^たべて、やはり、みんなは食^たべませんでした。

「お母^{かあ}さん、ねこは、鰹^{かつぶし}節^{ぶし}をたくさんかけてやっても、ご飯^{はん}を食^たべませんよ。」と、子供^{こども}たちはいいました。すると、お母^{かあ}さん
は、

「ご飯^{はん}のいれ物^{もの}が汚^{きた}いからでしょう。よく洗^{あら}ってやらなければ、

ねこだつて食べませんよ。」といわれました。

三人は、そうかと思ひました。それで、こんどは、よくいれ物を洗つて、ご飯をおいしく造つてやりました。けれど、ねこは、やはり、ご飯を食べませんでした。

そのうちに、ねこは、生魚より食べないことが、みんなにわかつたのでした。三人の子供たちは、自分たちが、父母にねこの世話をすることを誓つて、ねこを飼つたことを覚えてゐるから、できるだけの世話をしたのでした。そして、ねこがご飯を食べないのは、まったく自分たちのせいではなく、ねこがぜいたくだからだということがわかりますと、三人の子供たちは、ねこを憎らしく思つたことに、無理もなかつたのでした。

「わたしは、もう、あんなねこに、ご飯なんかやらないわ。」と、姉ねえさんがいいました。

「僕ぼくだつて、いやだ。」と、弟おとうとがいいました。

すると、末すえの弟おとうとが、二人ふたりの言葉ことばに憤ふん慨がいをして、

「だれもご飯はんをやらなければ、死しんじまうじやないか？ そんなら、僕ぼくがやるよ。」といいました。

こうして、ねこは、みんなから、きらわれるようになったのでした。

そればかりではありません。ねこは、いくらしかられても、ふすまで爪つめを磨といだり、障しょう子じを破やぶつたりすることをやめなかつたのでした。そして、ときどきは、血ちだらけになったねずみをくわえ

て家へ上がってきただのです。三人の子供たちは、いまようやく、お母さんや、お父さんが、生き物を飼うことは、骨のおれるものだといわれたことがわかったのです。

「ねこをどこかへやってしまおう。」

「だれか、もらってくれないだろうかね。」

「こんなに大きくなって、もらうものがあるものか」

「捨てればいいや。」

三人の子供たちは、こんな話をしていました。小ねこが、この家へもらわれてきた日のことを考えると、三人の話はたいへんな相違だったのであります。

こんな冗談が、とうとうほんとうになって、ねこは、ある

ひ、酒屋さかやの小僧こそうの自転車じてんしゃに乗せられて、家うちからだいぶ離れた、さびしい寺てらの境内けいだいへ捨すてられました。

いままで、生なまぎかな魚なまぎかなでなければ食たべなかつた、ぜいたくなねこ

は、ふいに、人家じんかもない寂さびしい場所ばしょへ、ただ独ひとり置おかれたので、

驚おどろいてしまいました。しばらく、あたりを見みまわしていましたが、

そこはどこであるか、かつて見みたことのないところで、見けんとう当とうが

つきませんでした。ねこは、急きゆうに、悲かなしくなつたのです。そして

なにとは知しらず、体からだがぶるぶると震ふるえてきました。

夜よるの空そらを渡わたる風かぜが、林はやしに当あたって、怖おそろしい音おとをたてていまし

た。人にんげん間の姿すがたも見みえなければ、なつかしい家うちの燈あかり火かりももれてき

ませんでした。ねこは、心こころ細ほそくなつて、悲かなしい声こゑをあげて泣な

きながら歩きました。

どこへいっても、暗い林がとり巻いている。そして、自分の泣く声は、空しく、しんとした夜の世界へ吸い取られてしまいました。いつしか、その声もかれてしまった。だんだん腹は空いてきた。ねこは、かつて、こんな悲しいめ、苦しいめに出あつたことはなかつた。いままでは、空腹ということを知らず、お嬢さんや、坊ちゃんたちにかわいがられていたことを考えると、それは、どんなに幸福なことであつたらうか。

ようやくのことで、ねこは、狭い道の上へ出ました。その道は、どこから、どこへつづいているのかわからなかつた。ねこは、しばらくそばの垣根の下にすくんで、なにか、聞きなれた物音で

も耳みみにはいらないかと考かんがえ込こんでいました。

ちようど、このとき、目めの前まえを白しろい犬いぬが、うつむきながら通とおり

かかった。ねこは、それを見みると、はっとして驚おどろいた。しかし、

瞬しゅんかん間に、その犬いぬは、よく自じ分ぶんの家の勝か手てもとへきて、自じ分ぶんに

おどかされて逃にげていった犬いぬだということを知しりましたから、ね

こは、つい声こゑをかけてみる気きになつたのでした。

「もし、もし。私わたしですよ。どういつたら、家うちへ帰かえれるか教おしえてく

ださいませんか。」と、ねこはいいました。

白しろい犬いぬは、振ふり向むいて、近ちか寄よつてきました。

「あなたでしたか……。どうして、こんなところへきたのです……」

「わたしは、捨てられたのです。」と、ねこは、正直しょうじきに答えましこたた。

すると、犬いぬは、軽かるいたため息いきをつきました。

「やはり、あなたにも、そういう運命うんめいがめぐってきتانですか。あなたは、いばっていましたね。私わたしが、お腹なかが減へって、なにか、あなたの食たべ残のこしにでもありつこうと思おもって、勝手かってもとへ顔かおを出だすと、あなたは、飛とびつきそうな、怖おそろしい剣幕けんまくをして、威おどされたことを忘わすれはなさらないうね。」と、犬いぬは、ねこに向むかって、いいました。

ねこは、こういわれると、さすがに気恥きはずかしかった。

「ほんとうに、私わたしが、悪わるかったのです。いま自分じぶんが、こうした境き

ようぐう 遇こになつて、空腹くうぷくを感じかんていますと、よく、あのときのあ

なたに同どうじよう情じようができるのです。もし、もう一度ど、私わたしが、家うちへ帰かえ

ることができたなら、この後のち、あなたに對たいして、あのような冷れいこ

酷くなことは、けっしていたしません……。」といつた。

しろいぬ 白い犬いぬは、黙だまつていました。

「あなたは、いつから、家いえがないのですか？」と、ねこは、たず

ねました。

「私わたしは、家いえを失なくしてから、もう三年ねんになります。私わたしの主人しゆじんたち

は、私わたしを捨すててどこへか移うつつてゆきました。私わたしは、その当座とうざどん

なにか、泣なきましたか。いまは、こうした宿無やどなしの生せい活かつに慣なれ

てしまつたが……。しかし、あなたは、捨すてられたのですから、

たとえ帰かえつても、家うちへは、いれてくれますまい。」と、犬いぬは答こたえ
ました。

ねこは、頼たよりなさと、悲かなしさと、空くう腹ふくの苦く痛つうに、ふたたび体からだ
を震ふるわしたのです。

「いれられなくてもいいから、どうか、もう一度、私わたしを、家うちの方ほう
へつれていってください。そして方まんに一つ、私わたしが、家うちに飼かわれた
ら、きつと、そのときは、あなたに、ご恩おんを返かえしますから……。』
と、頼たのんだのでした。

ちようど、このとき、三人にんの子こ供どもたちは、家うちで話はなしをしていまし
た。

「ねこは、いまごろどうしたろうね。」

「きつと家へ帰れなくて、うろろうろしているだろう。かわいいそうだな。」

「そんなら、捨てなければいいに……。」と、最後に、姉さんはいいました。

「僕が捨てるといつたのでない。姉さんが、あんなねこ、捨ててしまえといつたのでないか？」と、上の弟は、怒りました。

こんなことで、三人の子供たちがいい争っている、そばで、これを聞いていた、お母さんは、

「もし、今晚にでも、ねこが帰ってきたら、三人は、かわいいそ
うだから、よくめんどろをみてやるんですよ。」といわれました。
「こんど帰ってきたら、お母さん、僕一人でみてやる。」と、未

おとうとの弟が、答えました。

「それは、もう捨てられはしないわ。」

「ほんとうに、かわいがってやろうね。」

三人は、そういつて、昨日とは変わって、どうかして、ねこが帰ってきてくれればいと心に願ったのでした。

その夜は、ついに、ねこは帰ってきました。そして、二日めの晩に、勝手もとで、ねこの泣く声があったのであります。

「あつ！　ねこが帰ってきた！」といつて、三人は、飛び出しました。

子供たちは、争うようにして、ねこを抱き上げたのでした。

「よく、おまえは帰ってきたな。」

「感心だわね」

すえおとうと 末の弟はねこの体にほおずりしました。

「腹が空いているだろう……。」

ねこは、しきりに、泣いて、空腹を訴えていましたから、上の弟は、鰹節を削つてご飯をやりました。ねこは、飛びつくように、喜んで咽喉を鳴らして食べました。

「お母さん、ねこは、鰹節のご飯を喜んで食べますよ。」と、子供たちは、告げました。

すると、お母さんは、

「これから、生魚をあまりやらないようにして、なんでも食べる癖をつけなければいけません。あまりわがままにすると、ね

こだつて、いけなくなつてしまひます。」と、いわれたのです。それから、四、五日いちにちすると、白い犬しろいぬが、勝手かたてもとへ顔かおを出だしました。以前いぜんだつたら、ねこは、背せを丸まるくして怒おこりますのですが、そのときは、やさしい声こゑで泣ないていました。白い犬しろいぬは、最初さいしよ、遠慮えんりよするように見みえましたが、ねこの茶ちやわんへ進すすみ寄よつて、余あまりのご飯はんをきれいに食たべてしまひました。そして、いつてしまつたのです。

この後のち、幾いくたびとなく、白しろい犬いぬはやつてきました。そして、ねこのご飯はんを食たべていくのを例れいとしました。

一度どす捨てられて、苦くるしみを経験けいけんしたねこは、そのときの怖おそろしさと、頼たよりなさと、空くう腹ふくのつらさと、悲かなしさをいつまでも

忘れることができなかつた。そして、それを思うたびに、白い犬と約束したことを果たそうとしたのでした。

一日、白い犬がきて、ねこのご飯を食べていました。それを子供たちは見つけました。白い犬は、すぐに物蔭に隠れてしまつたが、子供たちは、ねこを捕らえて、

「おまえはばかだね。自分のご飯を食べられて、じつと見ている奴があるかい。」

といつて、ねこの頭をポン、ポン、と打ちました。

これを知つた、白い犬は、ねこを気の毒に思いました。

それから、白い犬は、この家の勝手もとへ影を見せなかつたのであります。

——一九二七·一〇作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「少女倶楽部」

1928（昭和3）年1月

※表題は底本では、「小《こ》ねこはなにを知《し》ったか」となっています。

※初出時の表題は「小猫は何を知ったか」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

2014年5月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小ねこはなにを知ったか

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>